

# 経済研究所主催 第4回学術研究大会「思想のちから、古典のちから」

開催日：2017年3月11日（土）14：00～17：30

会場：池袋キャンパス 8号館 8303教室

講師：◇服部 正治（本学名誉教授）

◇佐藤 有史（本学経済学部教授）

◇三戸 公（本学名誉教授）

司会：佐々木 隆治（経済研究所副所長）

## ■挨拶

櫻井 公人（経済研究所所長）

今、グローバリゼーションが反転しつつあると言われます。また、資本主義に限界が見えつつあるともいわれます。近代思想が反転してポストモダンと言われてからも久しいわけですが、ポストモダン思想が再転換して、今のようなせめぎ合いになっているようにも見えます。人の移動や移民が盛んになりにつれ、それぞれの言語・文化・思想を含めて受け入れようという「多文化主義」などが世界に根付くかに見えましたが、今やトランプのアメリカで起きているのは、これに対する反撃と「闘争」なのかもしれません。

そもそも「多文化主義」は、カナダにおいて独立志向を高めたケベック州をつなぎとめようとして提起された「二言語・二文化主義」が「二言語・多文化主義」に修正され、世界に先駆けた1971年の「多文化主義」宣言となったものです。

「多文化主義」を定着させた国があるとすれば、もう1つはオーストラリアでしょうが、1960年代までのオーストラリアはむしろ多文化主義とは正反対の「白豪主義」を掲げていました。これが転換したのは、かつての宗主国であったイギリスが1973年にEC（欧州共同体）に加盟して、英連邦諸国との経済関係を断ち切るようになるのがきっかけでした。イギリスがECに加盟して大陸欧州から酪農品や畜産物を輸入するようになれば、オーストラリアは英国市場から切り離されて重要な輸出先を失います。こうして、オーストラリアには、アジア太平洋の国として生き残るしかないのだという切羽詰まった事情が生まれ、日本とのつながりを模索するように貿易政策を転換しました。また、ボートピープルとなったベトナム難民を受け入れ、アジア系をはじめとする有色の移民を受け入れる方向へ大転換し、「多文化主義」を推進することになったのであります。

世界的には、カナダとオーストラリアがかりうじて今、この多文化主義を維持しているところでして、たとえばオランダなどは来週の選挙でどうなっていくかわかりません。アメリカでは、多文化主義をめぐって不満がためこまれ、これに対する反撃と闘争が展開しているようです。たとえば、トランプ大統領を揶揄するのにカリカチュア的な漫画を描いて批判しても文句は言われませんが、オバマ大統領に対して下手な風刺画を描いて批判すると犯罪だと言われる。この両極端は何だという思いがある。あるいは、“Merry Christmas”と言わずに、“Happy Holidays”と言いなさいということになっている。Political

Correctness をめぐって、こういう細かい、小さなレベルでの不満が人々の間にたまっていきます。アファーマティブ・アクションをめぐっても同様の事情があるかと思われま

す。問題は、人々の不満がこのレベルにとどまっていないところにあります。トランプ政権の首席戦略補佐官であるバノン氏がかつて運営していたサイトの“Breitbart”には、極端な白人至上主義の主張が打ち出されております。その思想はトランプ政策にも反映しています。おそらくアメリカで展開しているのは、こういうイデオロギーとカルチャー（思想と文化）の次元での争い、というより闘争なのだろうと思います。トランプ政権が何をやるうとしているのか非常にとらえにくいですが、究極のところにもそういった争いがあるかと思われま

す。本日は、「思想のちから、古典のちから」と題して議論していただく予定です。経済学は、近代の経済社会とともに生まれたのであり、今日の経済社会をつくった思想だと言えます。この経済学や、あるいは経営学の、古典や思想に立ち返って検討すること。これは大いに現代的な課題です。本日は、この課題に答えるため、OB、あるいは現役の先生方の中から論者を選んでお願いしております。

それでは、早速、本日の内容に入っていきますが、最初に、本学の研究所の副所長をしております佐々木先生から問題提起をいただいて、その後、3人の登壇者の先生方にお話をいただくというようにしたいと思います。では、佐々木先生、よろしくお願いします。

## ■問題提起

佐々木 隆治（経済研究所副所長）

経済研究所の副所長を務めております佐々木と申します。よろしくお願いいたします。コーディネーターということで最初に問題提起をしろと言われましたので、かなり大きなテーマですので問題提起が難しいのですが、私が専攻しておりますマルクスの関連で、若干の問題提起をさせていただきたいと思

います。ご存知の方も多いかと思うのですが、今年2017年は、マルクスの『資本論』の第1巻の初版が刊行されたのが1867年なので、『資本論』刊行150周年になります。また、来年2018年は、マルクスが1818年に生まれま

したので、生誕200年ということでありまして、それに関連して、多くの書籍が企画されております。私もその何冊か啓蒙書を書くことになっておりますし、海外でも『資本論』やマルクスに関する共著の書籍などが刊行される予定があり、そういったものに寄稿する予定がありますが、そういった形で多くの書籍や、あるいはカンファレンスが企画されてい

いう危惧を少し持っております。当たり前のことですが、古典と言われるような偉大な著作というものは、当然、読まないで理解できない。しかし、意外と読まれていないというのがあります。『資本論』も本当に読まれているのかどうか怪しいということが結構あります。というのも、いろいろな先行研究とかを見ていても思うのですけれども、そもそもそういった研究自体が解説書や先行研究だけを見てマルクスを理解する。つまり、『資本論』自体を読まないということですね。ましてや『資本論』草稿などは読まれていません。マルクスを取り巻く悪い歴史がありましたので、マルクスを神聖化するのはけしからんとか、そういうことが言われてきて、それも一理あるのですが、そういう言葉によって、結局マルクスを読まないということにもなってしまいます。私はもともと社会思想出身なので、社会思想でマルクスを読んでいないことはないのですが、マルクス経済学の先行研究などを見ても意外にマルクスを読んでいないと感ずることがあります。

例えばマルクス経済学で一番論文が多い分野というのは、再生産表式論やいわゆる転形問題ですが、再生産表式や転形問題というのは、いわゆる『資本論』の2巻、3巻に当たる部分であります。これはマルクス自身は完成させることができず、エンゲルスが編集したものですから、当然、古典を読むという意義から立ち返れば、マルクス自身の草稿に当たって当該箇所の草稿を丹念に検討しなければなりません。その上で初めてマルクスの再生産表式の意義でありますとか、いわゆる転形問題という問題になっているような生産価格論というものが理解できるというふうに私などは考えるのですが、そのような先行研究は極めて少数です。マルクスと関係ないところで議論して、それをマルクス経済学だと言っていることがあります。実際に理論的生産性があればそれでもいいのですけれども、ご存じのようにマルクス経済学はどんどん衰退して、まったくアクチュアリティもないというふうに思われておりますので、そういった古典を軽視するやり方が、実際マルクス経済学の衰退を招いてきたのではないかと私は考えております。

当たり前ですが、マルクスというのはマルクス自身を読まなければ理解できないということで、その精緻なテキスト研究の意義は今でもあるだろうと考えております。そういうことをきちんとやらないと、いわゆるマルクス主義という、政治的な分野で非常に影響力を持ったようなイデオロギーに知らず知らずのうちにとらわれてしまったり、あるいは先行研究で偉い学者が言っているからこうなんだということで、思い込みでマルクスを読んではしまう。そうすると、もう研究する意味自体がなくなってしまいますので、やはりマルクス自身をきちんと見ていかななくてはならないわけですが、実は50年ぐらい前にこれをやろうとしても非常に難しかったわけです。当時は環境が整備されておらず、マルクス自身のテキストが刊行されておりました。ところが、現在、MEGA (Marx-Engels-Gesamtausgabe)、『新マルクス・エンゲルス全集』、私も日本MEGA編集委員会の一人でありますけれども、この編集が進展しております。実際に著作だけではなくて草稿や手紙、あるいは研究ノートといったものがかなり読めるようになってきています。まだ刊行されているのが全体の半分強ですけれども、それでもかなりの部分が今読めるわけですから、そういったものに基づいてマルクスを再読できます。特に『資本論』関係の草稿は、すべて刊行されておりますので、マルクス経済学という意味では、これはいくらでも研究

できる環境が整っているのですが、残念ながら、そういったマルクスの草稿に立ち返るといふ研究は非常に少ないのが現状であります。

では、マルクス自身のテキストを丹念に読むことによって何が明らかになるのかというその中身なのですが、残念ながら時間がありませんので、ここではお話しすることはできません。代わりに二冊ほど、最新のマルクス研究について言及した雑誌を紹介したいと思います。

1冊が、『nyx (ニュクス)』という、20代、30代の若い哲学者の方が編集して刊行されている雑誌ですが、その3号で「マルクス主義からマルクスへ」という特集を組んでおりまして、文字どおりマルクス主義にとらわれず、マルクスへ原点回帰して、その古典のテキストそのものに沿って論じていこうというものです。特筆すべきなのは、先ほど出てきたMEGAの研究ノート—マルクスは勉強の仕方が抜粋なので、読んだ本をひたすら抜粋するという勉強の仕方をしておりまして、抜粋ノートと呼ばれるのですが—そのマルクスの抜粋ノートというものをかなり読み込んだ上でマルクスが非西洋社会について、あるいはジェンダー、エコロジー、恐慌、貨幣、国家、自然科学についてどう考えたか、ということ論じた論文を所収しておりますので、ご興味のある方はぜひご覧いただければと思います。

もう一冊が、ことしの5月ぐらいに『現代思想』の臨時増刊でマルクス特集が出るのですが、そこで、さっきの『nyx』は古典のテキストの読解そのものを問題にしているのですが、こちらのほうは、いわゆるアクチュアリティのほうについて論じています。マルクスを原点回帰してきちんと読んだ上で、その政治的なマルクス主義でもない、あるいは先行研究にもとらわれないような、きちんとしたマルクスの理解に基づいて、それで現代の問題をどういうふうに理解できるのかということ、私など日本の研究者も書いておりますけれども、主には海外の研究者の方の翻訳中心に、マルクスの理論がもつ様々なアクチュアリティ、つまり現代の資本主義の分析であるとか、国家の分析、そういったものを紹介するような増刊号になると思います。日本ではマルクスというのはもう限界があつて、特にそれ自体見るべきものもないというような見方があるのですけれども、世界ではそのアクチュアリティをちゃんと考えていこうという研究が、特に21世紀に入ってからいろいろな形で出てきておりまして、そういったところでも、まだまだマルクスという古典から学ぶところがあるんじゃないかと思っております。

私はマルクスが専門で、非常に狭い観点からしか古典、あるいは思想の力ということについてお話しできませんが、これからお話ししていただく先生は、もっと広い視野から、特に古典派経済学という視角から経済学の古典が持っている力というのをお話しただけかと思っておりますので、私もぜひ勉強させていただきたいと思っております。

それで最初に、まず服部先生のほうから「古典の読まれ方」ということで「スミスとカードウ」というテーマでお話しさせていただきたいと思っております。服部先生、どうぞよろしくお願ひします。

## ■「古典の読まれ方、スミスとりカードウ」

服部 正治（本学名誉教授）

2年前に退職しました名誉教授の服部正治です。今日の大きなテーマの「思想の力・古典の力」。これは正面から取り組むのは大変で、古典と思想はそう簡単にイコールではむすびつかないだろうと思うところもあり、私は「古典の」というところに焦点を絞りたいと思います。

「古典の読まれ方」という論題をつけたのは、要は、古典というものは後の人が古典と呼ぶのであって、読まれ方はその読み手によって随分違うはずだということを考えているからです。古典は書かれた時代とは別の、後の時代状況とそこでの問題意識でもって生まれるものであって、時代状況は変わるだろうし、問題意識も変わる。だが、どんな時代と問題意識から読んでも、その時代状況にとって大切な論点をそれぞれの読者に与えてくれるというところに古典の力があるだろうと思います。思想の力はそれとは違い、個別には古典なしにも成立し得ます。

スミスやりカードウについてもいろいろな見方があります。投下労働価値説、支配労働価値説などという観点からの読み方もあるかもしれませんが、私は自由貿易論、また、農業保護批判の著作として彼らの著作を読んで、彼らが穀物の問題についてどう論じているのかということはこの報告では考えたいと思っています。

ここで強調したいのは、彼ら自身も時代状況の中でこの穀物の問題を頭の中に置きながら理論を形成した、という点です。こうして、その理論自身はその時代状況の限定性というか、時代性を持っていたということを見ていきたい。

では、なぜ穀物なのかと言うと、私自身別の関心があって、特にイギリスでは20世紀の初めぐらいには、小麦について言えば自給率が2割ぐらいのところまで低下していましたが、21世紀に現在、小麦の輸出国になっています。こうした大きな流れの中で彼らは穀物の問題をどう論じたのか第一に確認しておきたいのは、スミスとりカードウの時代、18世紀の終わりから19世紀の前半ぐらいのところにおける農業の位置というのは非常に高いという事実です。産業革命があるにせよ、農業の位置は高い。現代において経済学が農業問題をどういうふうに取り込んで理論展開できているのか、また特に環境問題だとか、一国全体における食料供給の問題だとか、さらに現代における貧困の問題を含めてもいいと思いますが、こういった問題を考えたときに、やはり彼らもその時代の中で穀物の問題を考えようとしていたことは大切な点です。

それから第二に、やっぱり彼らの著作は古典です。彼らが穀物の問題を論じた場合に、大事なのは、個別に穀物はこうだ、工業製品はこうだと議論をしたのではなくて、首尾一貫した形で論理展開をして、自分たちの経済学の体系の中に穀物を、また農業問題を取り込もうとした点にあります。したがって彼らの主張は、彼らの時代状況の中で彼らなりの一貫性を持ってなされたものであり、後の時代で、またどのような立場の人にとっても古典だといわれるような位置にあると思っています。

スミスの場合、穀物というのは、当たり前の話ですが、人間存在にとって絶対に必要なものであって、しかも、人間が生きていく上で、ほかの穀物以外の肉だとかいろいろなも

のを含めて考えても、最もエネルギー効率の高い食料だということが大前提です。その上でスミス自身は、穀物がほかの財の生産を究極的に規定するという論理を中に持っています。

それからもう一つ。スミスの中の重要な論理として農業投資の優位性というものがあります。これは、資本投下の自然的順序論と言われるもので、スミスの理論の中では、重農主義的な残りかすみたいなものだと批判されたりもするところですが、むしろ私が言いたいのは、それを使ってスミスは何を論じようとしたのか、ということです。スミスは、ローマ帝国以降のヨーロッパの歴史の問題性—自然の順序ではなくて逆行的な順序で資本投下が行なわれた—をえぐりし、その延長線上に重商主義政策といわれるマーカンティリズムを批判するための道具として資本投下の自然的順序論を使っており、『国富論』の中の理論と歴史をつなぐ結節点のところで、穀物の意味だとか農業投資の意味というのが論じられています。

リカードウに話を転じます。リカードウは、経済学の本来の意味というのは分配論だということを『経済学及び課税の原理』の序文で述べています。分配論だと言った際、彼は、大地の生産物、土地の生産物が経済の進展とともにどのように分配されるのかということが一番大事な論点だと言っています。そこでは、地主と農業資本家と農業労働者という、完全に資本主義的な生産を前提にしたような議論ですが、その分配の問題を自分の経済学の中心の問題に置きました。工業に関しては、農業における利潤率に規定される形で議論ができるというのがリカードウの大きな考え方でした。リカードウにおいては、穀物の生産性が穀物価格を規定し、穀物価格が貨幣賃金を規定し、貨幣賃金が結局は利潤率を規定するという論理があるわけで、その限りで言えば、穀物の生産性が一国の資本蓄積、資本主義の発展を規定、制約していくという論理があります。だから、リカードウは穀物貿易の自由化を主張し、安価な穀物輸入の利益、イギリスにとっての利益を強調しました。

ここまでの議論はリカードウをやっている人なら誰でも知っていることですが、なぜ私が穀物のテーマでリカードウの議論を問題にするのかについてお話しします。穀物の輸入を問題にする場合には、当時のイギリスにおける農業生産は資本主義的なそれが典型的に行われていて、地主と農業資本家と農業労働者というところで行われている穀物生産が大前提です。なお当時のイギリスにおける穀物は、主に小麦です。では小麦の輸入先はどこかということ、大陸のヨーロッパで、ドイツと、それからドイツにその一部が含まれるポーランドでした。当時はポーランドが最大の輸出穀物の生産地であると言われています。

ところが、そこで生産されている小麦は基本的には輸出作物でした。一部は、ユンカーが食べていたと思いますが、全体として当時においては、ドイツなりポーランドにおいては主食はライ麦です。小麦ではない。そういうところでの生産のあり方は、リカードウが目前にしているイギリスの資本制農業とは違います。

リカードウにとっては、自国内で穀物自給している限り、最終的には利潤率が低下していったら、イギリスの経済成長を低下させるから、どこかで輸入するという議論になりますが、自分の国の資本制生産と輸出元の資本主義ではない、ユンカー経営になり、ポーランドなり、当時のイギリスからみれば遅れた生産様式の結節点に輸入される穀物が置かれる

ことになります。

リカードウにおいてもスミスにおいても、特にリカードウの場合ははっきりしていますが、資本主義という目の前の自国での農業生産のあり方の論理でもって大陸の農業生産のさまざまな問題を見てしまうという特質があると思います。スミスにおいては、現在の自分の目の前の農業生産と過去のヨーロッパの歴史における展開の仕方の問題点をえぐり出すところで農業なり穀物の問題は出てきて、過去の歴史を批判するためにあえて資本投下の自然的順序論を持ち出しました。リカードウの場合には、自分の目の前で生産しているイギリスにおける農業生産と、同時代でヨーロッパの後進から輸入する穀物生産とではそのあり方が違いますが、それを両者に共通する一つの論理として、具体的には収穫逓減法則によって、リカードウは論理を展開しています。彼ら自身も、その時代の時代状況の中で理論を形成したということ、理論自身の持つ時代性を読みとらなければならないと私は思います。

ところが、古典が古典として使われる場合には、時間を超えてスミスなりリカードウなりが、彼らの本意としたところとは別に、後代の人々が自由に、とくに政治家などはさまざまな意味で使ったりもするわけです。私が注目するのは、20世紀の初めのイギリスで、イギリスの穀物時給率が最低レベル、小麦でいえば2割程度に低落したときに、従来のイギリスの自由貿易政策を根本的に再検討しようと、ジョセフ・チェンバレンという政治家、穀物輸入関税を含む関税改革運動を開始しました。このときに、おそらく初めて大学の経済学教授を含めて、この関税改革運動についての賛否が『タイムズ』をはじめ様々な新聞に登場して、議論を戦わせることになりました。エコノミストが具体的な政策提言なり政策選択において、正面から激突した一つの例が、この20世紀初めに生まれてきます。ここでスミスが古典として取り上げられました。スミスの自由貿易論や農業保護批判は、穀物関税を新たにつくろうというチェンバレンの提案に反対することになるので、チェンバレンに反対する陣営の理論的な象徴のような形でスミスは持ち上げられます。具体的な例を挙げます。T.A. Ingram, Adam Smith on Free Trade and Protection, 1903は、スミスの『国富論』の第4編と第5編の最初だけを再録して自分の序文を付けて出版しています。第4編が出てくるというのは、スミスの重商主義批判の中で、当時の農業保護政策の部分があるからです。穀物輸出奨励金というのは当時の農業保護政策で、それについてのスミスの批判の部分を復刻するような形で出ています。

反対に、そうは言ってもスイスも別のことも言っているんだという人もあとから出てきます。ここで忘れないうちに言っておかないといけないのは、現在、『国富論』を読む場合には、1976年に出たグラスゴウ大学版の『スミス全集』で読んでいますが、私が大学院に来たころは、キャンナン版の『国富論』で読んでいました。その『国富論』を編集したキャンナンも、チェンバレンの関税改革提案に反対して、マーシャルらと一緒にその批判に名を連ねた人です。以上は、スミスを農業保護批判だとか、穀物輸入関税批判として使った例ですが、今度は、逆に、同じく20世紀初めには反対の論点が出てきます。

イギリスの穀物自給率が2割で、週末しか自給しない国民だという状況の中で、しかもドイツとの第一次世界大戦を間近にひかえて、帝国連合だとか帝国結合の重要性が、とく

に防衛面に関して増すこととなります。そこで、スミスの思想を応用して帝国結合に使うという人が出てきます。

また、第一次大戦の中で一番問題になったのはドイツの潜水艦作戦で、イギリスに穀物を輸送中の貨物線が沈没させられ、穀物供給がある時期、非常に深刻な事態を迎える。人間というのは、短期間で飢える存在であり、長期的・平均的に穀物があるから大丈夫だと言われても、毎日毎日恒常的に穀物や食料が供給されないというのは、戦争遂行上も重大事です。穀物供給の安定性が損なわれた時期に、スミスが言った富裕よりも国防が大事だという言葉が重要視されることとなります。

スミスはこの言葉を航海条例の意義を認める中で述べたのですが、この主張を使って議論した典型例は、ジョセフ・シールド・ニコルソンに見ることができます。彼の *A Project of Empire: A Critical Study of the Economics of Imperialism with Special Reference to the Ideas of Adam Smith, 1910* という著作は、副題を見ると分かるように、スミスの思想に関連して帝国の問題を論ずることを目的にしています。それはこの著作の *economics of imperialism* という言葉に表れています。

また、第一次大戦中に出された、*Free Trade and Protection: A Reconciliation, in War Finance, 1917* では、フリートレードとプロテクションを *reconciliation* という言葉で分かるようになんとか和解しようという主張がなされます。

ちなみにニコルソンという人は、チェンバレンの関税改革運動が穀物関税を含む点に反対して、マーシャルらとともに批判した人です。こうした立場をとって関税改革提案を批判した人が、関税改革提案が重視した帝国の結合につながる論点を重視して、しかも『国富論』の資本投下の自然的順序論を帝国結合につながる理論として独自に解釈しなおす形で、スミスを使うことになりました。ここまでが長くなりましたが話の前置きで、もう少し中身に入って話をします。

スミスが、分業の利益を重視しているというのは誰でも知っている話ですが、スミスは『国富論』第4篇2章で国内における分業の利益をそのまま横滑りさせる形で国際分業の利益を主張して論理展開しています。ただしここでスミスが強調するのは、穀物の自由貿易をやっても、イギリスの農業には打撃がないということです。せいぜい年消費の何百分の1ぐらいしか、穀物が輸入されることはないと言っています。それはある意味、当時において当たり前の話なのであって、現代のグローバル化の中で世界的な食料供給の問題とまったく事情が違います。イギリスが不作で穀物輸入が大きい年でも、1年間のうちの何日分程度の輸入しか実際にはありませんでした。

だから、スミスの論点はこのようになります。イギリスの重商主義というのは、連帯保護制度だといわれていて、製造業も保護するし、農業も保護するという二重の保護制度から成り立っていました。農業を保護するという場合には、穀物生産を奨励するために、穀物輸出奨励金を使って農業を保護、あるいは奨励していました。下駄をはかせて輸出させるというわけです。スミスは、そういうやり方が決して自分の国の農業生産の発展にはつながらず、国内の穀物供給を不安定にすると考えました。かえって農業生産を害する結果をもたらすという点がスミスの議論の結論です。スミスの時代までは、イギリスは穀物輸



出国であり、ちょうどスミスの時代の直前ぐらいから輸入国に変わりだします。ただし当時の認識としては輸出国なのであり、しかも農業は最大の生産部門なのであって、最も大量の労働者がそこで雇用されている部門でした。スミスにおいては、農業よりも商工業を優先する重商主義の間違った政策がなければ、本来、農業にもっと投資がなされて当然なはずなのに、なされてないという認識がありました。

農業に関連して、『国富論』の地代論にふれておきます。スミスの地代論は難しく、あまり読まれないところですが、その理由はスミスの地代論が、資本主義一彼の言葉では、商業的社会、商業が社会全体に広まった社会である commercial society- における地代分析だけではないという点にあります。資本主義の地代分析は一部にすぎず、初期社会から現在の商業的社会を貫く地代分析であり、そこでは穀物を作る土地の地代が肉を飼育する牧畜地の地代だとか、その他の食料・野菜栽培地、さらには、衣類だとか住居だとかその他の財の生産地の地代を規定することをスミスは論証しようとしてしました。それは、結局は、分業が穀物を作る土地から始まって社会全体に拡大する過程の中での地代の動きを説明しようとした、壮大なスケールのものでした。しかしながらこれだけ大きなスケールのもを、資本主義を前提にした単一の論理なり、首尾一貫した理論で説明しきるためにはかなり無理が出てくることも確かです。

ではなぜスミスが無理をしてそうした説明をしようとしたのかということと彼にあっては—これはスミスに限らず当然だと思いますが—穀物を主食としている温帯の人間にとってみれば、穀物は人間再生産のためのエネルギー効率のうえで最上位の財であって、穀物はそれ以外のさまざまな食料を含めて、それらの生産を規定する地位に置かれてしかるべきだ—という認識があります。ただしこの認識を、経済学においてどのように定義するのは別の問題だと思いますが、スミスにはこうした思想があります。スミスは自らのこうした基本の思想を、資本主義を前提にした価格メカニズムと資源分配論という手段でもって、昔から彼の時代まで一貫して説明しきろうとしてしました。資本主義以前の歴史過程を、資本主義を前提にした理論で論理化するのは無理な話だと思いますが、この手法でもって一貫して説明しようとして、無理な想定を組み入れることになります。

彼の資本投下の自然的順序論において、それがはっきり出てくることになります。農業・工業・商業の中で、農業が最も生産的だとか、農業においては自然も、また役畜も労働するだとかいう—人間の労働が富の源泉だ—という自らの大原則に反する形で—無理な想定をしたのがその例です。スミスの思想の中には、穀物には価格が変化してもその本当の価値は変わらない、という穀物の Real value 論があります。そこには、一定量の穀物は一定量の人間を生存させ、また一定量の人間は一定の労働をして財を生産し価値を生み出すという認識がありました。そこからは穀物の価格変化は穀物の real value の変化ではなくて、貨幣価値の変化に起因するという結論になります。この場合の論理は、穀物価格は、賃金ならびに原料価格を平均的・長期的に規定し、ひいては工業製品価格も規定して、さらには物価水準を規定する。この意味で、穀物は他の財の価格を規定する regulating commodity という主張です。自由貿易で穀物価格が低下しても、穀物の real value は変化せず、しかも穀物の自由貿易を行ってもイギリスに大量の穀物を輸出するような国はない

し、穀物は価値の割にかさが大きくて、輸送コストも大きいので、穀物自由貿易によっても輸入される穀物量は極めて少ないという結論が引き出されます。

もうひとつのスミスの議論の特徴は、穀物の国内取引の自由を穀物の国際的な取引の自由そのまま横滑りで議論するという点にあります。スミスはヨーロッパレベルでの自由貿易論を主張し、国内穀物取引の自由と穀物自由貿易を一体として考えて、穀物の国内取引の自由を行えば、例えば、フランスなどでの国内での地域的穀物不足の存在による一揆といった事実を解決できる、と主張します。ある地域では穀物はある、別の地域では国内の穀物流通の制限のために飢えが生じているという事実を是正する国内の取引の自由という論理を、今度は国を超えてヨーロッパ全体に適用して、自由貿易によってヨーロッパを一大帝国としてつなげれば、各国は、それぞれが帝国の中のひとつの州になって穀物供給が全体として安定すると主張しています。以上のスミスの主張を大きなところで基礎づけているのが、先ほど述べた資本投下の自然的順序論でした。

資本投下の自然的順序論が置かれたのは第2編5章です、第2編は『国富論』における1・2編の理論編をなす最後の章です。分業から始まって、価格論、賃金、利潤、地代、資本の蓄積、生産的・不生産的労働などが論じられて、その最後のところでこの議論を提示しています。それは、前に述べましたように、第3編のヨーロッパの歴史の逆行性を、資本主義の利潤追求を前提にして論証するための無理な想定を含む理論でありました。『国富論』の理論的な欠陥は、資本主義とそれ以前の社会との違い—結局は原始蓄積の無理解と言ってもいいと思いますが—を考慮せずに、両者における農業生産のあり方を一括りにしてしまう結果になった、と言えるかと思います。

まとめてしまうと、地代論ならびに資本投下の自然的順序論でのスミスの理論的破綻、恣意的な想定は、市場過程での価格メカニズムという手法では、農業穀物の本源的地位といった、スミスが持っていった思想を理論的、また整合的には説明しきれなかったということになると思います。

リカードウについては駆け足で話していきます。リカードウを読んでいてなかなか分かりにくいのは、穀物価格の上昇は農業資本家にとって不利益であり、それは賃金が上がって利潤が下がるからだという議論があります。リカードウの『経済学および課税の原理』は、今年が出版200年です。前にも述べたようにリカードウは、農産物の分配を基本に置いて、一国の分配総体を検討するのだと述べています。だが普通に考えたら、穀物を生産している農業資本家は、穀物価格が上がることに利益を感じるのではないかと、私はずっと考えてきました。若いときから、リカードウはなぜこんなことを言うのかと思っていました。だがよく考えると、リカードウは穀物価格をはっきり分けて論じているわけです。穀物の市場価格が上がった場合には、当然に農業資本家にとっては利益だけれども、それとは別に穀物の自然価格というものがあり、自然科価格を中心にして市場価格が上下に動いています。ところが、農業の収穫逓減を考えると、穀物生産を増大したときに、穀物の自然価格は上がっていくわけですので、上がっていった場合を考えれば、市場価格の上昇は自然価格のそれを、結局は結果し、その時点に至れば穀物を生産する農業資本家にとっても不利益だということになります。「結局は」に至る過程においては、もちろん、農業資本家

に利益になる局面があり、それがマルサスとの論争を生みもしますが、その限りで言えば理論的に首尾一貫しています。

もう一つ、リカードウの議論の中でよく取り上げられるものに、比較生産費説があります。経済学部授業の中でも何度も取り上げられる問題ではありますが、実はなかなか難しい問題です。ポルトガルとイギリスで布地とワインと生産して、両国のそれぞれの生産性に応じて特化の利益を導き出す議論です。二国二財モデルで、二国間での相対的な生産性を不変という想定をして、国内での交換比率以上の交易条件が成立する場合には、それぞれに特化していくことで利益が出るという論理です。リカードウはこんな言葉を記しています。この比較生産費説という原理が、フランスとポルトガルではワインを作り、穀物はアメリカとポーランドで生産し、イギリスはハードウェア、産業革命の中でだんだん生産が出てきた金物類やその他の工業製品を生産するように決定するのだと。しかしながら重要なのは、イギリスでは穀物は生産しないということにはならないわけで、リカードウ自身もそんなことを考えていたわけではありません。

リカードウは国会議員で、議会の演説で、イギリスは穀物法を廃止して、穀物の輸入制限をやめたとしても、「一大農業国」にとどまると明言しています。また著作（『農業保護論』）や手紙などを含めて、自由貿易をした場合の穀物の輸入量は、*only a few weeks* だということを繰り返し述べています。1年は52週ですから、*a few weeks* という言葉で言いたいのは、イギリスは膨大な量の輸入国にならない、ということです。

以上を考えると、一体リカードウの理論体系の首尾一貫した議論とこうした発言とを、われわれはどのように整合的に考えればいいのかという問題が生じます。

1821年の農業不況委員会の証言で、穀物の輸出国側の生産事情がイギリスのそれとははっきり異なる事実が詳しく述べられています。それをリカードウは、イギリスへの小麦の輸出国で輸出量が増大すると、輸出国の劣等地耕作が進み、生産性が低下する一方、穀物を輸入するイギリスでは劣等地耕作が廃止され、穀物の生産性の高い土地しか使われなくなるので、一方は低下していき、他方は上昇していくわけだから、どこかで交点が出てくるわけで、そのベクトルの交点が輸入量なのだ、と言っています。つまり、収穫逓減がイギリスの資本主義農業においても言えるし、資本主義農業ではない、ユンカー経営のドイツや、さらに遅れた生産様式のポーランドやロシアの農業もみな一括りにし収穫逓減を適用しているわけです。その意味では論理的には一貫しているわけです。

だが、一体、大陸ヨーロッパでの当時の穀物の輸出余力が、人口が増加しつつあるイギリスの小麦必要量を充たし得るのかという問題が、リカードウの論理とは別に存在します。イギリスにとっては *only a few weeks* の小麦量にせよ、輸出国にとっては大量であり、しかも大陸では主にライ麦が食用として使われており、ライ麦の作付けと小麦の作付けとは、国民の食料であるライ麦のほうが圧倒的に多いという現実がありました。

そういう中で、農業不況委員会で証言した大陸農業の事情に詳しい穀物商人は、ドイツ、ポーランドにおける小麦の輸出能力には、封建的な制約から脱し切れてないその農業生産のために、構造的に大きな限界が存在することを、またイギリスの穀物価格が大陸のそれを規定している現実を述べていました。これは農業収穫逓減とは一応別個の性質の話です。

こう考えてみると、リカードウの首尾一貫したといわれる議論の性格は、自分の国の農業生産と穀物輸出国の農業生産の生産様式の違いを穀物を結節点にする形で、収穫逓減というリカードウにとっての首尾一貫した論理で説明しきろうというような枠組みになっていると言えます。

しかしながら、穀物自由貿易を行ってもイギリスは一大農業国にとどまるのだという主張は、リカードウだけが言っていたのではありません。19世紀前半の当時の人々は、穀物法が廃止されて穀物の自由貿易が行われても、イギリスの穀物自給率が20世紀の初めのように2割にまで低下すると考えていた人は誰もいなかったと思います。その理由は、当時の遅れた大陸ヨーロッパの生産様式で輸出される穀物が、19世紀の間に3倍にも増えるイギリスの人口を養えるとはとても想定できなかったということです。これだけ大量に増える人口に見合うような穀物を恒常的に輸出できるのかという問題は当然存在するわけで当時としては、農業の自由貿易を行っても、イギリス農業が破壊されるだとか、大量の穀物が外国から輸入されるとは思わなかったのも、当然だったと思います。

さらに付け加えれば、高い人口増加率を前提に、19世紀の間に人口が3倍にも増加するという状況下では、穀物の自由貿易の下で穀物輸入が増えて穀物自給率が下がっても、論理的には国内での穀物生産の増大と両立することは可能であり、イギリスでは農業改良の進行を伴って、穀物価格の低下の中でこうした現実が生まれていました。

しかしながらスミスとリカードウの時代を超えて、19世紀の終わりから20世紀の初めにおいて関税改革運動が展開された時期は、ヨーロッパでの小麦供給の限界を超えて穀物がイギリスに輸入され、数週間分の消費量だとか、一大農業国にとどまるといった認識は崩壊していました。それは、19世紀後半からの新大陸アメリカへのイギリスから移民が農業生産を行い、さらにアメリカの中では東西横断鉄道が開設されて、穀物生産地が西部に拡大し、そこで肥沃な土地で生産された安価な穀物が海を渡ってイギリスまで大量に来るようになったからです。

ここで穀物価格は一気に低落しました。イギリス農業は、この時点で生産量ならびに生産金額で見ても絶対的に低下しました。この時代に、20世紀初頭のチェンバレンの関税改革運動を批判したマーシャルは、収穫逓減法則はイギリスではもはや作用していないと言い切りました。イギリス国内で食料を生産しなくても、外国から安い食料が大量に輸入されれば、収穫逓減を考える必要はないということです。また、地代についても、リカードウの場合の差額地代論は、収穫逓減前提にした上で地代の増大という議論であったわけですが、マーシャルにおいては、もはや地代は土地に固有のものではなく、機会や誰にも負けないような人間の高い人的な能力も、準地代 *quasi-rent* といいますが、それを生み出すものだという論理をマーシャルは打ち立てて、地代概念を土地から解放しました。

そしてマーシャルの前にジェヴォンズは、希少性に基づく効用価値説でもって、パンとか穀物は飢えているときには高い価値を有するが毎日毎日、普通に穀物が供給されているときには、穀物もほかの商品とまったく同じなのであって、もはや穀物は *one of them* に過ぎないんだという事実を自分の経済学の基礎に置いた形で、経済学を生産からの観点ではなくて消費からのそれに依拠する学に変えていました。

最後に一言で終わりにします。

後に古典と評されるスミスやリカードの著作が書かれた時代から離れて、「週末しか自給しない」といわれた 20 世紀初めの時代状況の中で、彼らの論理を政策に適用しようとする場合に、彼らの著作の時代適応性を結果的には超えている部分が出てきたと思います。

ここから、古典、特にスミスが政策的に相対立する論者から、それぞれの二重括弧にしましたが『古典』として評価される理由があったのではないかと思います。

いったんここまでにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

#### ○司会（佐々木）

服部先生、ありがとうございました。古典が持つ普遍的な理論と、それを通り巻く特殊な歴史的状況との関連から、古典が後にどういうふうに評価されたかということの関連をお話しいただいたと思います。

それでは次に、本学経済学部の佐藤先生より「奇跡の 200 年：イギリス古典派経済学 1623-1823」ということでお話しいただきたいと思います。佐藤先生、よろしくお願ひいたします。

#### ■「奇跡の 200 年：イギリス古典派経済学 1623-1823」

佐藤 有史（本学経済学部教授）

経済学部の佐藤です。本日、私はご指名いただきまして、用意してきたこの「奇跡の 200 年：イギリス古典派経済学 1623-1823」という表題で話をさせていただきたいと思ひます。

まず、経済学の歴史を学ぶというのはどういうことなんだろうかということなんですけれども、私自身は学ぶというより学生に教えている立場なんですけれども、いろいろな立場があるだろうと思うんですけれども、私自身は経済学部の学部案内のパンフレットにこういう文章を記載させていただきました。

経済学の歴史を学ぶべき一つの理由は、経済学の過去を理解することで現在の経済学の状況を一層明確に知る機会が得られるのではないかと。そういうことにあるだろう。科学の歴史には、本来は改善を重ねてよりよいものに進化すべきはずのものが、実は途中で変な方向に曲がってしまうということもしばしばあるわけですし、もちろん他方、着実に年を重ねるごとに改善するという領域もあるわけなんですけれども、これは自然科学だけではなくて、経済学にも同じことが言えるのではないかと。そういう思いを私は持っていました。

これは後にスラッファという人の意見を少しご紹介したいと思うんですけれども、もちろんよく投資の神様のウォーレン・バフェットという人が連日のようには新聞紙面その他で取り上げられるときに、バフェットの愛読書は何かと聞かれるときに、彼はいつも『国富論』だとすぐ答えるのですね。古典の読まれ方というのは、とにかく何かあったらもうその本を読む。言ってみれば、お題目のように、聖書のように、とにかく毎日のように読

むという人もいるだろうと思うのですね。そういうふうな読み方を、僕自身は、否定はしませんけれども、ただ、やはりそういった読み方にはある危険性が実は一方であって、そういうふうな読み方ではない読み方を学生にいつも指し示したいと実は思っているところがあります。それが本日の私のつたない話の柱になっていくわけです。

あともう一つは、やはり古典ということに関して言うと、思想との関連ということは別にして、まず古典というものの自体が古典である以上、読まれる楽しみ、読む楽しみというものがやはり持てる。そういうふうな資格を持っているものが古典になるのだろうと思います。これはどんな領域の学問分野でもやはり古典というものはあるわけで、読む楽しみ、読まれるということが当然であるような資格を持っているもの。そういうものがあると思うのです。とりわけ人文諸科学を見てみますと、例えば哲学や美学や政治学というのは、これは古典を読むということが現代を生きるという、そういう直結した営みになっているわけで、私からするとうらやましい限りですけれども、経済学にもおそらくそういうふうな要素はあるのだろうと思います。この事柄に関連したこともあとで少しお話することがあるかもしれません。

それで、最初のほうにお話しした途中で変な方向に曲がっているのではないかという実は懸念を 1927 年に発していた人が、このピエロ・スラッフアというケンブリッジ大学の経済学の、言ってみれば、黒幕の一人のような人だったわけです。この人が 1927 年に「私たちと古典派経済学者たちの間には、もう無理解という底なしの、奈落の底がもう開いてしまっている。これはとんでもないことである」ということ言っています。この 1 世紀が彼ら、古典派経済学者と私たちとを分かっている。私は 1 世紀と言ったけれども、実は、半世紀後、1870 年代には連中はすでに古典派経済学を理解していなかったということ言っています。

1870 年といえますと、半世紀引くと 1820 年になるわけですが、基本的にデービッド・リカードウが亡くなった年が 1823 年ということですね。それから 50 年たってしまつたら、もう私たちはまったく違う世界に生きてしまっていることになってしまっている。うしろのほうを見ますと、例えば、話している言葉が違うから彼らのことが理解できないのか。いや、そんなことはない。アダム・スミスが使っている英語と私が使っている英語はまったく同じなんだ。それでも理解できなくなってしまう。これは一体どうしたことなんだ、何が起こってしまったんだというのが、このスラッフアの 1927 年の、これはノートに書かれているものですが、こうした思いも、このスラッフアという人が『リカードウ全集』という、イギリスの Royal Society が初めて出版した個人全集ですね。経済学全集ですが、それを編む非常に強力な動機になったのだろうと思います。

このスラッフアがこういったことを言った 1927 年というのは、まさにケインズの『一般理論』が出版される前夜であって、古典派経済学者たちはまったく真であることを述べただけでも今は一体どうなっているのだ、変な方向に進んでいるんじゃないかという思いが、スラッフアの先ほどのお話にあったわけで、ちょっと細かく見ていくと、スラッフアは最初、ウィリアム・ペティという人を大変重視して、もしかするとイギリスの経済学者の中でペティが一番優れた人ではないかというノートも残しています。しかし、結局

のところスラッファがたどり着いたのはデービット・リカードウです。

本日の話はペティが生まれた1623年からリカードウが亡くなった1823年という、ちょうど200年の間にどういうふうなことが起こって、その結果どういうふうなことを私たちに残してくれたのか。そういう話をするということを考えてまいりました。

代表的な4人の経済学者のエピソードを交えながら少しご紹介してみたいと思います。

何しろイギリス経済学の幕開けを記したのはこのウィリアム・ペティという人で、骸骨を握っている人ですけれども、見るからにやはりちょっと変な感じの人に見えるかもしれません。この人は1623年に生まれて、13歳で商船のキャビンボーイとしてもう仕事を始めて、キャビンボーイをした途端に、今度は船が座礁して右足をくじいてしまって、そのまま船に乗せておくことはできないということで、フランスの沖合からボートに乗せられて、カーンというフランスの町に捨てられました。そこからいろいろなことをして、なんと22歳でイギリスに戻ってきたときには、その翌年にはオックスフォード大学の解剖学の教授になっているという、よく分からない人です。最近、このペティに関しても大変いろいろなことが分かってきて、特に短い2年間の間ですけれども、この1646年の前の2年間の話ですけれども、トマス・ホブズという『リヴァイアサン』書いた人に大変愛されて、ともに解剖台に向かって人体を解剖したりというふうなことをしたという、そこから辺の細かい記録もだんだん見つかってきているようです。

このオックスフォード大学の解剖学教授だったペティは、すぐにその教授職をやめて、クロムウェルの軍に従って軍医総監としてアイルランドに渡って、ここで有名な『アイルランドの政治的解剖』という、political anatomyという、解剖学教授がまさに社会をアナトマイズするという本を書きます。これが、あとでご紹介しますリチャード・ストーンという国民経済計算でノーベル経済学賞をもらった人がいますけれども、彼が大変に激賞する本に結実すると。1663年に『租税貢納論』という、ここで少し注目したい本を書いて、1687年に亡くなるわけですが、このペティは、出自は大変いかがわしくて、その後何をやったのかということに関していろいろなうわさがあったわけですが、少なくともそれから100年後にはランズダウンという、イギリスで名だたる貴族のいわゆる祖先ということになりました。このランズダウンというのは、19世紀になると、最もリベラルな、非常に先進的なウィッグの貴族として、後にデービット・リカードウたちと大変な改革運動を進めるという人になっています。

ここに書いてあるのは、有名なあのアン・グリーン事件ということで、1650年12月、アン・グリーンという少女が、自分の子どもを殺したのではないかということで裁判にかけられて絞首刑になります。絞首刑は大変厳格な形で行われて、死刑執行人の人も死んだということを再三、確認して、もう死んだということが分かって、当時のしきたり、やり方に従ってオックスフォード大学の解剖学教室に送られて、いわゆる実験材料として使われると。そういうふうな形で運ばれていったわけですが、そこにいたのはウィリアム・ペティでして、ペティがこの少女を生き返らせた。死んだ少女を生き返らせた。Wonder of Wonders, 世にも不思議な物語というようなことで、一気に世間にウィリアム・ペティの名前が広がって、ペティは当代一の解剖学者であるという名声を高めたという有

名な事件があります。

そうしたペティですけれども、先ほど少し話に出しましたけれども、リチャード・ストーンという、ナショナルアカウンティングでノーベル経済学賞をもらった人は、このペティに関して、はっきりと the originator of national accounting と名付けて、彼の非常に分厚い経済思想史の本の最初をペティから始めています。とにかく実験精神に優れていて、しかし万能の天才じみたところがあるということでこのストーンが激賞しています。もう一人、ペティを激賞している人は、かのカール・マルクスですね。『経済学批判』の中で、ウィリアム・ペティ、いわゆるイギリス古典派経済学というのはペティから始まってリカードウで終わるといふ、そういった有名な文章を書き残しています。

こうしたペティは、実は今言いましたエピソードとは別に、経済学というのはこのようなものなのだということを遠く 200 年先まで、いわば指し示した重要な考え方をいくつか残しました。

先ほど服部先生のほうからお話がありましたけれども、私たちが日々市場で見る現象の一つに価格というものがありますが、その価格には 2 種類があって、一つは自然価格と呼ばれるものであって、もう一つは市場価格と呼ばれるものであって、私たちの研究対象は自然価格に向かわなくてはならないということを最初に言い始めたのはペティなんですね。

ちょっとここだけで読んでみますと、ほとんどすべての商品にはその代替物、すなわち代用物があるということ。また、ほとんどすべてのものには幾つかの用途があるかもしれないし、さらに目新しさ、驚き、上流の人々の手本や、分析しようもない効果についての評価のために、物の価格は騰落する、上がったたり下がったりするので、我々は上述の持続的な諸原因に、つまり先ほど見ましたこれですね、自然価格ですね。同じ時間内に生産できるか、それとももっと時間がかかるかということですが、に、これらの偶然的な諸原因を加えなくてはならない。これらのことについて、懸命に予見したり計算したりすることが、実は市場の中で生きている商人の美德に存することなんだということを言っています。要するに、こういうことを最初にペティが言い始めたわけですね。

こうしたペティ、非常にいかがわしいところがある人物とイギリスの中でいわれていましたけれども、したがって、ペティの本というのはなかなかイギリスでは流通しなかったんですけども、しかし、ペティをイギリス古典派についての創始者と見なし得る理由について 2 点ほど出してみると、何よりもペティは経済学、初めてイギリスで political oeconomies とか oekonomicks という言葉を言い始めたのはペティなんでね。ちなみに économie politicue、political economy という言葉を最初に言い始めたのが 1615 年のフランスのモンクレティアンだといわれていますけれども、それはすぐにこういうふうなイギリス英語の中に輸入されて、political economy という言葉がもうできつつあることが分かります。

こうした経済学の分析対象として永続的な諸原因により決定される自然価格というのを最初に言い始めたのがペティです。きょうこのあとの話は、こうしたペティの自然価格概念がその後、どういうふうな変遷をたどっていたのかということに少し注意を皆さんに



お示ししたいと思います。

2番目に取り上げるべき人は、リチャード・カンティロンという人です。このカンティロンという人は、最近ではネット上でこれが肖像画でないかというものが出回っていますが、はっきりどういうふうな顔をしている人かは分かりません。ただ、奥さんと娘さんはもうはっきりしています。これは娘さんですね。ヘンリエッタという人で、スタッフォード伯爵のお嫁さんになった人です。

このカンティロンという人は今どういう位置づけを持っているかという点、カンティロンという人はもう毎年毎年新しい研究が更新されている人で、一番新しいカンティロンの『商業試論』の版本が、van den Berg という、これはイギリスの大学の先生ですが、2015年に出したものです。このカンティロンという人は、少なくともマルクス、ジェヴォンズ、ハイエクが、それぞれことによったらスミス以上に優れた経済学者でないかという点で激賞した経済学者です。

ただ、いかんせんこれは経済学の専門家以外にはなかなか名前が広がっていない。そういううらみのある人ですので、きょうは少しくこういう場面で取り上げる点にも意味あるんじゃないかと思っています。こういったマルクス経済学、それから新古典派、そしてオーストリー学派という異なる、ハイエクの場合には奥さんがドイツ語訳を、カンティロンのドイツ語訳を出しているわけですが、これほど異なる学派の人たちが共通して、やはりカンティロンはすごい人だと言っているのは、何か意味があるんじゃないかと思っただいていいかなと思います。

よく経済学の歴史をやっていると、こういうことを言う方がやはりいるんですね。これは理由があります。アダム・スミスは彼の著作の中で1回もウィリアム・ペティの名前を出したことはありませんし、それかアダム・スミス・ライブラリーといわれている所蔵本のカタログがあるんですけど、その中にもウィリアム・ペティは含まれてないわけですね。だから、それをもって意図的にペティを抹殺したんじゃないかということはいわれたりもします。スミスは虚栄心から、知っていたペティを『国富論』から抹殺したということを書いて、アダム・スミスの犯罪とおっしゃる方もいるんですけど、しかし、実は、スミスはカンティロンを読んで、カンティロンは『国富論』で引用しています。スミスは『商業試論』の初版を持っていますし、それから、これも重要なことですが、グラスゴー大学には第2版が1756年に入れられているということが図書館にも記録に残っています。誰が入れたのか。これはスミスが入れたのではないかということをやったり我々は疑っているわけですね。

4番目ですけども、その証拠は一体何かというと、まずカンティロンの本というのは、基本的にイギリスではほとんど手に入りにくいものである。1881年にジェヴォンズという人が“Richard Cantillon and the nationality of political economy”という有名な論文を出して、リチャード・カンティロンこそが現代経済学の創設者といっている資格を持っていると言ったんですけども、その論文の中に、実は私はカンティロンの『商業試論』を持っているけども、ケンブリッジ大学に調べにいったら、ケンブリッジには所蔵されていない。オックスフォードに行っても、オックスフォードでは所蔵されていない。では、どこにある

かと調べてみたら、ブリティッシュミュージアムにしかないんだということをジェヴォンズは言っていました。もっともジェヴォンズはグラスゴー大学の図書館は調べなかったようですが、ともかく、それくらい稀覯本で、しかし、この考え方を、カンティロンは何を言ったかということを知り、それをイギリスの中で広めたのは、まさにスミスであったと言っていると思います。

このカンティロンの実際の生涯をたどってみると、こういうことになっているわけですが、この人はアイルランドに生まれて、それからフランスにすぐ渡って、そして海軍主計長官という人と個人的に仲よくなって、その見返りにフランスで銀行業を開けたと。しかし、そのときにたまたまジョン・ローと昵懇になって、それでジョン・ローといろいろ共同作業を行って膨大な富を得るわけです。おそらく、あとでやりますデービッド・リカードウという大成功者を除くと、おそらく経済学、少なくともイギリス経済学の歴史上、2番目ぐらいに財をなしたのがこのカンティロンでないと私は思っています。

ところが、このカンティロンは1834年にパリ、ジョン・ローの関係者たちがまだ残存していたパリから逃れてロンドンに居を移すのですけれども、そこで放火に遭いまして、その放火のあとに1人の焼死体が見つかった、これはカンティロンではないかと当時の新聞に書かれているということなんです。しかし、最近の研究では、あれは影武者であって、南米に逃れたという強力な証拠があるという、新しい証拠を出している伝記者がいます。それもかなり蓋然性が高いかもしれません。ただ、それから21年後に、いきなりフランスで『商業試論』が匿名で出版されるという形になっています。

このカンティロンの本の中に何と書いてあるかということ、ペティのことが書いてあります。ペティは土地と労働の等式による平価の関係が政治算術上、最も重要な問題だと考えているけれども、ただ、やり方がよくなかったと書いてあります。ペティの名前は、調べますとこの『商業試論』の中に3回出てきているということが分かります。それ以外にもペティを読んでいる人は、名前は出てこないけれども、ああここはペティをやっているなということがすぐ分かるような書き方をしたりします。

このカンティロンがやったことは何かということ、要するに、ペティを受けて、内在価値と市場価格ということがあって、市場価格というのは、毎日の変動とやむことのない高下の波動があって、なぜこういう変動が起きるかということ、人々の気分だとか気まぐれだとか好みというのがあって、これが毎日、値段を変えてしまうんだと。ところが、内在価値は、その生産に入り込むと土地と労働の量の大きさに決まるので、内在価値というのは決して変動しないんだという言い方をしています。ペティの自然価格と市場価格と同じですね。ペティは自然価格のことを *perpetual*、市場価格のことを *incidental* というようなことを言っていましたけれども、それをまったく受けている形になっています。

では、この内在価値というのは何なのかということ、結論からいうと、生産費であるということですね。フランス語では *des frais* という言語を使っていますが、Higgs の英訳では *costs* ということになっていますけれども、これが内在価値の内実なんだということを言っています。

以上、やっとアダム・スミスの前史が終わったわけです。いよいよアダム・スミスにた

どり着いたわけですが、スミスというのは、もう経済学者の中でも最も著名で、最もよく語られる人物であるということは、皆さんもなんとなくそうだろうと思われると思います。一応、このスライドを作ったのは3月6日ですが、日本ので調べてもしようがないので、アメリカのAmazon.comで、タイトルにアダム・スミスというのを打ちつけて、何冊出ているか調べたら7,660冊出ていました。ケインズで打ち込むと4,640冊ですね。同名の著者の本が紛れ込んでいるかもしれませんが、でもまあこんなものだろうと。ハイエクは、ちなみに2,524冊です。さすがにマルクスはすごいですね。9,853タイトルがヒットしました。

マルクスはちょっと別として、アダム・スミスは、我々経済学者は一応、どうしても主要なスミス研究にアンテナを張っていなきゃいけないので頑張っているんですけども、こういったスミスの状況というのは、21世紀になってからますます激しくなっていて、我々の間ではアダム・スミス産業という言い方をしています。これは、どんどん、どんどんあつという間にストックがたまってしまって、インベントリーがたまってしまって、在庫の棚卸しが大変だという状況になっています。ただ、それくらい引きつける人物なんだろうと思います。

このスミスに関しては、有名な言葉をパーッとここに並べました。「競争」と‘fair play’というのを社会科学の文献に最初に言い始めたのはスミスであるということに間違いありません。それから「見えざる手」であるとか、「自然的自由の体系」であるとか、有名な言葉がありますけれども、ここではそのペティ、カンティロンを踏まえて、natural priceということにスミスがとても関心を持って、私たちに残してくれたんだということを確認しておきたいと思うんですね。

有名な『国富論』第1編第7章に「自然価格と市場価格」という章があります。ちょっと読んでみますと、「自然価格というのは、いわば中心価格であって、そこに向けてすべての商品の市場価格が絶えず引きつけられるものなのである。さまざまな偶然の事情が、時にはこれらの商品価格を中心価格以上に高くつり上げていることもあるし、また、時には幾らかその下に押し下げることもあるだろうが、このような静止と持続の中心に落ち着くのを妨げる障害が何であろうと、これらの市場価格は絶えずこの中心に向かって動くのである」ということで、ここでもやはり偶然と永続性という対比が使われているわけです。

これを見ますと、これはもうまさに偶然以上の何ものかがペティ、カンティロン、そしてスミスと同じ表現を使わせたんだと見ないほうがおかしいと思うんですね。これが古典派経済学の、今ペティが誕生してスミスが亡くなるまでの167年目くらいに来ていると思うんですけども、流れであるということです。

リカードウの肖像が出ています。リカードウは1772年に生まれて1823年に亡くなった人で、小学校しか出ていませんけれども、経済学の歴史上、最も財をなした経済学者として有名です。1817年、これは今年200周年になりますけれども、主著『経済学および課税の原理』が出版されたということです。

このリカードウは、そうしたスミスの自然価格・市場価格を受けて何と言ったのか。ちょっとここで見てみますと、こうなっています。

『国富論』7章では、この問題に関するすべてのことが最も見事に論じられている。そこで主商品の交換価値、すなわちどれか一つの商品が持つ購買力について論ずる際には、私は常に何らかの一時的または偶発的な原因によって妨げられない場合に、その商品が持つであろう力のことを言っているのである。そしてそれが自然価格なのであると」言っています。リカードウ、偶発的というのは accidental の日本語訳ですけれども、共通した言葉が200年使われているということが、ここでお分かりになっていただけるだろうと思います。

ここから先は、今の経済学と、先ほど見ましたスラッフアと、それから我々がこの古典派経済学、とりわけリカードウをどういうふうに見ているかということの話になるわけですが、それまでずっと流れてきた伝統に対して、リカードウはここで一回整理をし始めるんですね。ところが、スミスはそうした自然価格と市場価格という主張にかなう価値論をつくり上げることができなかったというのが、リカードウのスミス批判ということになります。

ここにスミス『国富論』とリカードウ『原理』の各対応をやっています。リカードウはスミス『国富論』第1編のすばらしい第7章は、その前後の諸章における議論の混乱によって台無しにされてしまったというふうに、この1章から7章にかけて議論を展開していくということになります。

ここから先は、価値論と呼ばれるものを私たちはどういうふうに考えているかということで、きょう服部先生、それから佐々木先生、それからこの後に三戸先生がいらっしゃって、同じような話をされる可能性がありますので、ちょっと今、我々がどういうことを考えているかということをご紹介しますと思いますが、アダム・スミスに有名な文言がありまして、「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態にあつては、種々の物の獲得に必要な労働量の比率が、これらの物を相互に交換するためのルールを可能とする唯一の事情である」という文章が『国富論』の中にあります。そして有名な「ビーバー一匹は鹿二頭に値する」。これはどういうふうに整理しているかということ、こう整理しているんですね。商品  $i$  に投下された労働時間を  $h$ , hour の  $h$  とします。その価格を  $p$  とします。賃金率、賃金率というのは、時給とか日給というふうに時間でどれくらいお支払いするかというものを賃金率というふうに経済学では呼びますがけれども、それを  $w$  としますと、スミスによると、初期未開社会において商品格を構成するのは  $h$  時間の労働に支払われる賃金、 $w \times h$  なので、したがって商品の交換比率は、例えば1番と2番の商品を交換するときには、こういう式になって、 $w$  は分子で通分されて時間の比率になる。こういうふうに考えるわけですね。

時間というのは何なのかということ、生産の難易とスミスは言っていますが、要するに、作るのに難しいのは時間がかかる。作るのに簡単なのは時間がかからないということで、こういうのを技術的条件と経済では呼んでいます。この技術的条件は別名、労働生産性といいますけれども、労働生産性は年から年にかけて、簡単に上下するものではありませんので、かなり perpetual な与件として見ている。それに対して、市場価格は偶発的な原因で動くと。こちら側のほうが本筋だという言い方をスミスはしていたわけです。

ところが、スミスはこんなことを言い始めるわけですね。資本主義社会になってしまうと交換価値が労働だけからなるような商品というのはほとんど存在しない。大部分の商品の価値の中には地代だとか利潤というものが入り込んでしまっている。その生産物を産出したり市場に運ぶのに投下された労働よりはるかに大きな多量の労働を、そうした地代や利潤を含む商品は購入できるのだと言ってしまっている。

これをさっきの話に戻して整理するとこうなります。一商品の価格を構成する賃金を  $W$ 、wage ですね。利潤を  $\Pi$ 、地代を、これ  $R$  にしたいんですけど、 $R$  だと rate of profit の利潤率とかぶってしまいますので、 $\Lambda$ 、 $L$  のギリシャ語で  $\Lambda$  を使わせていただきます。 $\Lambda$  とすると、資本主義社会では価格は  $W + \Pi + \Lambda$  となって、それを賃金率  $\times$  時間というふうに直すようになります。両辺を  $w$  で割ると、 $\frac{p}{w} = h + \frac{\Pi + \Lambda}{w}$  ということになります。

この  $w$  で価格  $p$  を割ったものを賃金単位と呼んで、別名、支配労働といいます。これは、その経済量で何人の人を雇用できるかという指標ですね。ケインズが『一般理論』で使った経済単位と同じことです。そうすると、農業ではこの地代部分が一番多くなるので、農業では  $w$  分の  $\Pi + \Lambda$  が一番大きくなります。なので、雇用能力が農業では一番ということになります。それから、製造業では、都市部にある工場というのはあまり地代がかかりません。なので、次に農業のほかに、2番目の雇用能力を持つと。素手労働だけは、もうこれだけなので、一番、雇用能力がないなんていう形になって、資本投下順序論というのは、ある意味、この式を素直に、スミスは展開したと言うこともできるだろうと思うのですね。これが支配労働から投下労働ということですね。

これで『国富論』が終わってしまっているんですけども、リカードウはこういうふうなことを言ってしまったら、自然価格が価格の中心というのは一体どういうふうな話になるんだと激しく反発するんですね。そこで、もし地代が生産費の中に入っていない、地代は生産費から無視できるということを前提にすれば、商品価格はこうなる。 $\Lambda$  がなければいけません。そうすると、利潤  $\Pi$  は  $p$  から  $wh$  を引いたものですので、それを  $wh$  で割ってやると利潤率が出てきて、部門間で競争が起こって、各部門の利潤率が  $r^*$  で平均化すると、これは平均利潤という形になりますので、これが、要するに、第2商品の生産費、これが第1商品の生産費ということになって、要するに、利潤は存在しても、ちゃんと投下労働の比で決まりますよというのが、これが実はリカードウの説であったわけですね。

もちろん固定資本が存在する場合はどうなるんだということなんですけれども、ここは固定資本  $k_1$  を導入させています。リカードウが「機械論」の中でやっているように、今、ある部門の、どこの会社でも構いませんけれども、その企業の総労働人口  $L$  を半分ずつにするわけですね。そのうちの2分の1は昨年、機械を、あるいは生産手段  $k_1$  をつくらせた。残りの半分は、今年その機械を使って商品を作らせる。それがこの式になります。そうすると、この  $k$  というのは、昨年の投下労働2分の  $L_1$  に  $w$  を掛けたもの、それに  $1 + r$  を掛けたものということになりますので、こういうふうな生産費の形になります。

$$p_1 = (1 + r)(wh_1 + k_1) = (1 + r)w \frac{L_1}{2} + (1 + r)^2 w \frac{L_1}{2}$$

こういうふうに、固定資本をどんどん、どんどん労働費用タームでの生産費に還元するというのを、日付のある労働量への還元と私たちは呼んでいます。

先ほどの商品価格は、そうすると、計算結果はどうなるかということ、投下労働量の比になるということですね。さっきは  $h$  だったのに、なぜここは  $L$  なんだということなんですけれども、時間とか日数だと  $h$  で構わないんですけれども、例えば、ひと月であるとか、1年ということになると、あまり時間でやっても意味がないので、今度は人数でやるわけですね。人数に1人あたり賃金  $w$  を掛けてやって賃金費用を出すということをやっています。

ちょっとここで注目すべきは、おそらくマルクスはこういうふうな古典派の考えに影響を受けたのだと思いますけれども、ただ、マルクスのモデルとどこが違うかというと、こちら側の古典派のモデルは、生産費、価格タームなのですね。マルクスは、これはやっぱり価値タームに変えないとおかしいんじゃないかということで、1回価値に替えて、またこれに戻ってくるわけです。そうすると、どうしても転形問題が出てきてしまうということがあります。リカードウは生産費で十分だと考えたということになります。

最後の問題ですけれども、では、そもそも地代というのは生産費から除けるのか、価格から除けるのかという問題があります。価格はさっき  $W + \Pi$  で終わったのですが、 $\Lambda$  がどうして価格の中に入らないかということを証明するのが差額地代なんですね。公準として資本家は平均利潤を取得できる限りで農業生産を実行する。実質賃金は所与とする。そうすると、差額地代の原理というのが論証できるということです。要するに、地代は生産費、すなわち自然価格に入らない。地代は価格の結果であり、原因ではないというのが、これが差額地代の原理ですね。逆説的ですが、差額地代論というのは、地代は価格に入らないということを証明するための理論です。

モデルはこういうモデルになります。ちょっとここは省略しますが、パシネッティモデルに基本的に従っていますけれども、パシネッティと違って、分子に  $(1+r)w$  が来るというのがリカードウのモデルだとここで言っています。

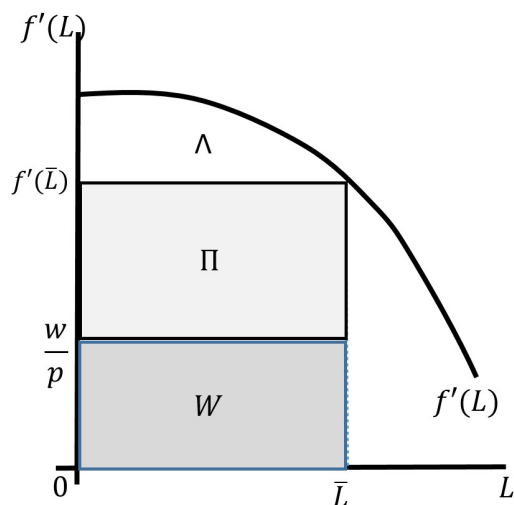
地代は  $\Lambda = \int_0^{\bar{L}} [f'(L) - \bar{L}f'(\bar{L})] dy = f(\bar{L}) - \bar{L}f'(\bar{L})$  で与えられ、穀物1単位の価格  $p$  は、 $\bar{L}$  人の労働者の投下が平均利潤を伴って回収されなくてはなりませんから、

$$pf'(\bar{L})\bar{L} = (1+r)w\bar{L}$$

を満たさなくてはならず、 $p = \frac{(1+r)w}{f'(\bar{L})}$  となります。

ちょっと分かりにくいかもしれませんが、ド・クインシーのモデルをちょっと使わせてもらいます。1844年ですね。ド・クインシーという人は、これは湖畔詩人、イギリスロマン文学のリーダーの一人ということですが、この人は、よく分かりませんが、リカードウの熱烈な崇拜者だったんですね。1821年に『阿片常用者の夢』という本を書いて、あるいはベルリオーズとか、いろいろな人に、芸術家に影響を与えたんですけれども、その『阿片常用者の夢』の中にこういう一節が出てきます。「イギリスにデービッド・リカードウの『原理』が出現したときから、ヨーロッパの科学は一変してしまった。リカードウの目というのは、inevitable eye、誰もそこから逃れられない目を持っている」。心酔していくのですね。その人がリカードウの地代モデルはこうだと言っています。どの土地で資

本家が生産を行っても、労働者には決まった、どこの劣等地だろうが、優等地だろうが、賃金を払わないといけない。そうでないと、労働者はより高い農場のほうに逃げてしまう



〈図1. カルドア＝パシネッティ・モデル〉

ので、少なくともお隣と同じくらいの賃金は払わないといけない。それから、資本家はどうかということ、どこの土地に行っても同じくらいの利潤が手に入るのでなければばからしくて投資はしない。優等地の、このRというのは地代なんですね、rent なんですけども、優等地では地代が多く、劣等地ではゼロである。こういうふうに劣等地耕作が進んでいくと、さっきのこの式をちょっと見ていただきたいんですけども、土地の限界生産物がだんだん小さくなると、価格は上がっていきますよね。穀物価格は上がっていきます。これ、どんどん、どんどん穀物価格は右のほうに、限界生産物の交点が移るに従って穀物価格は上がっていきます。でも、残念ながら資本家はもうかりません。一般的利潤、平均利潤しか手に入れることができないわけですね。だから穀物は、穀物価格は、これは資本家にはほとんど意味がないということになります。

ただ、穀物価格が足りなくて、このwに払わなきゃいけない部分が増えていくと、資本家は苦しくなります。だから、農業生産が進むということは、農業資本家にとっては痛しかゆしということになりますね。進むにつれて賃金部分をたくさん払わなくてはいけないということになると、こんなに農業生産盛んにやっているのに、なぜ私たちは苦しくなるのだという逆説になってしまう。こういうふうにして、リカードウは初めて自然価格というのは生産費であるということをはっきりと示して、そして自然価格と市場価格の200年にわたる論理的問題に決着をつけたと私たちは考えています。このリカードウの自然価格論は、その後、一方ではマルクスの『資本論』、他方ではアルフレッド・マーシャルの『経済学原理』に受け継がれていくと考えていきます。

ただし、それらはリカードウによって完成されたものとはやや異なるものだと判断しているというのが私たちの考え方で、1927年に早くもスラッファは古典派にもう一回帰ったほうが良いということを私たちに訴えかけていたというのが結論になります。

最後になりますけれども、今、スミスやリカードウはどういう形になっているかということ、スミスは、さっきも言いましたけれども、アダム・スミス・インダストリーという形

で盛んなんですが、どちらかというと『道徳感情論』のほうが『国富論』よりも重んじられている。僕は仕事柄、アダム・スミス研究の本を買わなければいけないんですけども、

No. 1.	w	P	R	R	R
2.	w	P	R	R	
3.	w	P	R		
4.	w	P			

<図2. ド・クインシー・モデル>

そろえなければいけないのですが、私の全文献費の3分の1はアダム・スミス関係になってしまっています。しょうがないです。これは職業柄しょうがないんですけども、それに対してリカードウの場合は、基本的に経済学、代表的な分野は今5つあると思っています。きょうは一番左側のお話をしましたけれども、「内生的経済成長論」も、特にヨーロッパ大陸のほうでは盛んです。「外国貿易論」は、four magic numbers ですね、4つの魔法の数字。これは比較優位を発見したということで、リカードウは今も第一線の研究対象になっています。「通貨と金融政策」、これはまた私の一番の専門分野なんですけれども、大変、今面白いことになっています。3月14、15日に立教大学でことしも国際ワークショップを開くんですけども、来年、再来年と5年間、立教で開こうと思っていますので、世界中の学者と議論していきたいと思っています。

それから、「財政政策」は、これはハーバードのロバート・バローが有名ですけども、いわゆる財政学の Neo-Ricardian という、いわゆるリカードウの等価定理その他を含む理論ですね。これは日本の中でも今盛んになりつつあります。そういうことになっています。

最後に、何か変なブログがありまして、経済学の古典を買いました、すごいでしょうというふうなことをいつも私に見せてくれる、非常にお金持ちなんだと思いますけれども、楽しいブログがあるんですが、その中で、時間があつたのでということで、こんなことを調べてくれたのですね。シュンペーターの『経済分析の歴史』という1954年に出た本があるんですけども、その東畑精一訳の中で一体誰がどれくらい言及されているんだろうかということ調べたというんですね。すごいこと、時間がかかったと思うのですが、シュンペーターという人は、いわゆる四大経済学者として変な人を挙げたことで有名なんですね、ケネー、それからクールノー、それからワルラス、そしてマーシャル。これがシュンペーターの四大経済学者ですね。それを聞いたサミュエルソンはハーバードの教室でみんな笑っていたというんですけども、実際はそうでもないと思うんですね。シュンペーターという人はヨーロッパの上流階級育ちですので、イギリスだとか功利主義が大嫌いな人だったので、イギリスに対して非常に厳しい見方をしていたと思うんですが、実際は、ではどうかというと、一番、特に3ページ以上にわたって言及していたのはカール・マルクス。それから、次はさすがにワルラスが出てきますけれども、その後はマーシャル、リカードウ、J・S・ミル、ケネー、スミスという順番で来ているということですね。このリカードウの次のところで急にガクッと下がっていく感じもしますけれども、ちょっと僕のほう



で原書に当たって名前のヒット数だけコンピュータを使って調べると、こういう形になりました。マルクスが920のヒット。ワルラスは547、マーシャルは700、リカードウ779、そしてミルは、これはちょっと父親のジェームズ・ミルと区別がつかない部分があるんですが、720、スミスが643という結果になりました。

やはりシュンペーターも、ここに挙げているような経済学者、意外とリカードウは、評価は別として、いろいろ研究して、スミスは意外とやはり、こういうレベルであったんだなということを改めて感じた次第です。以上で私のお話を終わります。

#### ○司会（佐々木）

佐藤先生、ありがとうございました。価値論の歴史をペティからリカードウまで追いながら、それらの持つ現代的示唆についてご教示いただいたかと思います。

#### ■「情報革命における資本と組織」

三戸 公（本学名誉教授）

はじめに

「情報革命における資本と組織」をテーマとして、ここ数年勉強して来ているので、この題で報告を申し込み、2016.11.11付で総合タイトル「思想のちから、古典のちから」のもとに報告を許可された。

「思想のちから、古典のちから」とは、いかなる意味であろうか。古典も思想も日頃知りきった言葉として使っているが、古典の方はともかく、思想の方は古典のようにはいかない。思想は思と想が重ねられている。それには個人のもとの社会の思想とがある。社会思想はそれぞれの社会にそれに即応した思想が生れ、それがそれぞれの社会を大きく動かしている。その中に個人の思想が生れ、それなりの働きをしている。古典とは変りゆく社会を通じてお手本となり、典拠となりゆくものであろうか。

現代そして現在、とり上げるべき思想は何であろうか。その思想にいかなる古典がいかなる典籍が有効なちからを発揮してくれるのであろうか。

総合タイトルのもとで原題の報告時間をたずねたら、「時間は35－40分、〈資本と組織〉という問題について、社会科学や経営学の古典、思想をふまえて切り込む一例をぜひ」との返あり。指示通りにすることにする。

とり上げる古典は代表的なものとなればマルクス「資本論」とバーナード「経営者の役割」ということになる。だが、ウェーバーそしてフォレット・ドラッカーにもふれたい。それよりも現代社会において、資本と組織はいかなる状況のもとでいかなる態様をとっているか、そしてその構造のもとにある社会はいかなる社会思想を発生させ力を発揮しているか。それに対して古典はいかなる力をもっているか。それは現在を生きるわれわれの仕事である。

## I. マルクス『資本論』1867年、他

### 1. マルクスを学ぶ

資本論が書かれたのは、産業革命（1760 - 1870年）を背景とし、それによって資本制生産社会が成立、展開したその構造と機能をシステム論として論述した圧倒的な著作である。言うまでもなく、構造と機能論・システム論が社会科学の方法としてその名をもつことになるのは後のことである。

### 2. マルクスとマルキシズム

1925年終戦、「負けるとわかっている戦争を何故したのか」の疑問をもった私に、滝沢克己先生は「マルクスをやってごらん。九大にはその方のすぐれた先生がいる」と言われた。マルクスの名をその時はじめて意識した。

禁書になっていたのに3人を除きどの先生もマルクスに拠って講義、学生は好きな講義しか出なかった。国富論の英書講読の正田誠一先生のゼミに入った。先生は資本論の読み方として、次のように言われた。

「one word から one word へと切り離ち難くつながって one sentence がなり、one sentence から one sentence へと切り離ちがたく連らなって one paragraph となり、それが paragraph から chapter へ、それがそのように展開して一冊の本となる。それをそのままそのように読み取り、我がものとするように読め。」

また『資本論』岩波文庫版の訳者向坂逸郎先生は、「子規の鶏頭の十四五本もありぬべし」のようにそのままさらっと読め、繰り返し繰り返し読め」と言われた。

マルクスの理論の特長は〈理論と実践〉であろうか。マルクス主義と言われる所以である。マルクス理解の違いによって、講座派・労農派・宇野派が生まれ、いずれにも属さぬ理論派も生れた。

私は講座派の社会科学研究会に入っていたが、労農派の向坂先生も招いた。そして、いつか全学自治会委員長に押され、全学連の全大学ゼネストの決定を議する大会に出席したりした。その頃日本は革命前夜を思わせる様相を呈し、国鉄ゼネストなどG.H.Qが止めた。

どの派にも顔を出す私は、無派閥の馬坊克三先生の経営学専攻の特待生となった。最初に書いた論文「装置の基本的性格」は、当時大きく論じられていた技術論論争の諸論文を読むうちに、資本論の労働過程論に装置製造会社勤務の経験知を合体させたものであり、資本把握において労働過程論抜きでは不十分だという認識を強くもち、現在に及んでいる。そして、最初の著書は『装置工業論序説』有斐閣である。

次に書いた論文は、当時経営学の4番バッターとも言われていた藻利重隆教授『労務管理論』批判であった。資本論に依拠した経営学は個別資本運動説とか、批判経営学とか呼ばれた。

熊本商大に奉転した翌年1955年は「もはや戦後ではない高度成長はここからと言われる自民党・社会党両党による55年体制もこの年より始まり、90年代村山内閣まで続いた。日本経営学会のこの年の大会の統一論題「戦後10年の企業経営と経営学の再検討」に私は、「個別資本説の展開のために」と題して傑出した馬坊克三理論の紹介と批判の報告をした。

同志社大に翌年移り、『装置工業論序説』と『個別資本論序説—経営学批判』を書き、労働組合に話に行く実践の多忙さを避けたいと思い始めた頃、1961年マル経で知られた立教経済の招きに応じた。

立教に移り、〈理論と実践〉が教授会の運営に及んでいることに流石と感心した。だが、翌年経営学科長2年を終える頃からようやく違和感をもつようになり、それは深まった。学部運営はあくまで研究・教育の充実発展を根幹とすべきであると考えていた私の考えは、大学の民主化を最優先として教授会運営がなされている状況には違和感を強くし、俺のマルクスとは違うとの感を深くしていった。その頃、社会主義国ソ連のソルジェニチンのものが紹介されたりした。大学紛争が立教でもマルクス主義以外の思想を主流として起こった。

1970年「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われ、そのような本がアメリカで出され、日本でもそれに続き、高度成長が安定成長に移行していった。日本的経営論が大きな論題として浮かび上がって来た。有賀喜左衛門に依拠して何冊か書いた。海外留学によってマルクスだけでは日本を論じきれないと思っていたからである。

この間、私の講義科目の経営学は〈骨はドイツ・肉はアメリカ〉から〈アメリカ一辺倒〉に大きく移行していた。私もまたその流れに従った。その根拠は、必ずしもマルクスとマルキシズムとの違いの認識の深まりより生ずる軋轢（あつれき）によるものではない。決定的な根拠は、経済学と経営学＝管理学は根本的に異なる学問であるという認識をもつようになったからである。アメリカ管理論批判としてドラッカー、サイモン、テイラー等の批判論文を書いていた私はバーナード『経営者の役割』を読み進んでゆくうちに、経済学と経営学とは全く相異なる学問である、という認識に達したからである。その問題に入っ

てゆく前に、ウェーバーについて言及しなければならない。

その前に、マルクスとマルキシズムの違いを象徴するような共産党宣言の一節をひいておく。

階級と階級対立とをもったブルジョア社会のかわりに、各人の自由な発展が、すべての人々の自由な発展のための条件となるような、一つの協力体があらわれる。(都留大治郎訳)

ついでに、マルクスの最も好きな格言「全てのものは疑いうる」。

## II ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』1920年、他

『資本論』を肯定しながらも、それだけで事足りしとしないウェーバーは、事物を基礎においた生産力と生産関係の唯物史観に立つマルクスに対して、精神史観に立って傑出した業績を残した。マルクスが社会を生産手段の所有・被所有関係によって歴史が成り立っているものと捉えているのに対して、ウェーバーは社会を支配・服従関係によって成り立つものと捉える。支配・服従関係は正当性の有無、そして正当なる支配としてカリスマ・伝統・法の3者をとらえた。二人の見解は、今なお、生きている。

精神史観に立つことをそのまま示す『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の末尾に資本主義の発展の未来について心に残る一節はよく知られているが、引用しよう。

将来この鉄の檻の中に住むものは誰なのか、そして、この巨大な発展が終わるとき、まったく新しい預言者たちが現われるのか、あるいはかつての思想や理想の力強い復活が起こるのか、それとも—そのどちらでもなくて—一種の異常な尊大さで粉飾された機械的化石と化することになるのか、まだ誰にも分からない。それはそれとして、こうした文化発展の最後に現れる「未来人たち」≫ letzte Menschen ‹にとっては、次の言葉が真理となるのではなかろうか。「精神のない専門人、心情のない享楽人。この無のものは、人間性のかつて達したことのない段階にまですでに登りつめた、と自惚れるだろう」と。(大塚久雄訳、岩波書店、1988年)

資本主義社会の発展過程に生きたマルクスとウェーバーが、二人ともその未来を暗いものと画いている。だが、その先はちがう。マルクスは労使の対立の激化・労働者階級の貧困・抑圧は団結・革命による明るい新世界の出現を予言した。ウェーバーは法的支配の必然的進行は官僚制の抑圧による先の引用文を予言したままである。マルクスもまた、官僚制論を具有していたとを、私は『官僚制』未来社、1973とくに第二章において紹介している。

ウェーバーは、どうしてもとり上げたいと思う問題を『職業としての学問』1919のまとめとしてこれ以上なく深刻に提起している。その箇所を引用する。

この学問の意義として残るものはなんであろうか。この問いにもっとも簡潔に答えたのはトルストイであって、かれはつぎのようにいっている。「学問は無意味だ。なぜなら、学問は『われわれは何をなすべきか』とか『われわれはいかに生くべきか』とかいう、われわれにとって重要な、ただ一つの問題に答ええないからだ」と。学問がこういう答えをあたえないということは、あらそう余地のまったくない事実である。

(出口勇蔵訳『ウェーバー・宗教・社会論集』河出書房、1968のうち)

彼はこの主張の説を長い長いパラグラフ5節を重ねて次のようにも言っている。

だがほんとうの教師であるなら、おおびらにもせよ、におわせるにもせよ、教壇から受講者にむかって何かの立場をおしつけるようなことは、注意して、しないであろう。なぜなら、もし「事実をして語らしめる」というなら、そんなことをするのは、たしかに、いちばん不誠実なやりかただからである。

彼はなお足れりとせず、この問題を論じ続けて終っている。(職業としての学問)をテーマとしたら、当然の成り行きであろうか。

価値自由の立場を学者として主張したウェーバー、資本論を肯定しながらマルキストを肯定しなかったウェーバーの当然の言説であろうか。私もこの言説に同調したが、今はそのように考えていない。その理由は、価値自由の立場であっても、命このかけがえのない

もの、価値を生み出し創り選択する根源を断つ行為、人殺しは絶対に許容すべきではない、と考えるようになったからである。個人の行う人殺しが許されざるものと、誰でもそう考えており、法としても皆が決めておる。だが、戦争という大量殺人行為はそのように考えられていない。個人的殺人が許されざる行為なら、集団的・組織的大量殺人行為は更に許容されるべきではない。平和裏に事を解決する努力をすれば、必ず精神的にも物質的にも豊かな未来が開かれる。努力なしに、成るものは人間世界にはない。人間生存の基礎の自然破壊の行為も人殺しと同じように許容されるべきではない。今こそ M. フォレット『創造的経験』（文真堂 2017）が読まれるべきである。

行為なくして結果は生まれない。個人的行為ではなく、協同的行為を研究対象とする学問が経営学であり、管理学であるが、これ以上に大事な学問はあるだろうか。

### Ⅲ. バーナード『経営者の役割』1938年

産業の発展・資本主義の発展がヨーロッパからアメリカに移った頃、19世紀末から20世紀初頭に起った能率増進運動の中からテイラーの科学的管理が生まれ、それは急激に世界に展開して行った。私はこれを管理革命と名付ける。産業の構成要素の企業における労働手段の科学＝技術化によって惹き起された社会現象を産業革命と把握すれば、生産における不可欠の要素である労働＝協働労働さらには協働一般の科学＝技術化の惹起した諸現象が管理革命と把握されるべきであろう。その学問が管理学であり経営学である。

この学は二つの流れとなる。協働労働の成果と成果達成における機能性追求の研究と、これを視野に入れつつ管理現象そのものの体系的認識と管理現象がその環境たる社会にいかなる役割を果しいかなる意味をもつかの流派に分れて発展して来た。

ここで今取り上げるバーナードは、後者における決定的役割を為した『経営者の役割』の著者である。〈経営者の役割〉は何であるか。それは〈組織維持の機能の職業的担当の仕事〉である。そして、組織は、企業だけではなくあらゆる協働体系その存在を成り立たしめている基本的要因である。経営学の対象は自明のこのように企業と考えられているが、そうではない。一切の協働体系がその対象となるのであり、協働体系である国家諸機関も大学外全ての学校が病院も一切の文化的・体育的諸団体等々人間の社会的行動の一切が入る。この事を強く意識して、〈組織とは何か〉組織の概念を比類なく見事に展開したのがこの著作である。『資本論』になぞらえて『組織論』と名付けられたらどうか、と私は思う。

著者バーナードはアメリカ電信電話会社の社長を20年勤め、数多くの公的・国家的・国際的な組織の役員を数多く引き受けた経営者である。その彼のこの著作は、マルクスの『資本論』の論述展開に酷似している。すなわち、具体から抽象そして抽象から具体へのシステムテックな展開の見事さである。

マルクスは、まず資本の構成要素である商品価値と使用価値の統合物と捉え、いま一つの要素たる貨幣を価値表象物と把握する。次に二要因の流過程を資本と捉え、資本を労働過程と価値増殖過程の合体物として把握し、更に、この具体化の論理的過程をどこまでも追って、現実の経済的諸現象にまで及んでいる。

バーナードは、様々な目的の相違する人間協働から出発して、その相違を生ぜしめる具体的諸要因を捨象することによって組織を析出し、組織の三要素を共通目的と目的達成に貢献する組織参加者の意欲の二要素に加えて、両者をつなぐコミュニケーションの三要素を析出する。その上で三者がそれぞれ段階的に具体化され、その上で組織維持機能としての管理論が展開されている。『資本論』と違うところは、『経営者の役割』においては、これを抜きにしては論ずることの出来ない前提として〈人間とは何か〉についての全人仮説が置かれていることだけであろうか。

終章結論は「要約」と「組織理論の根本問題」の二者からなるが、最終の二つのパラグラフを少し長いがどうしても引用したい。

著者が意図したわけではなく、あるいはおそらく読者も期待しなかっただろうが、本書はその根底において、人間の生に内在するこの深刻な逆説と感情の対立を含むこととなった。自由と非自由、支配と被支配、選択と被選択、誘因の供与と誘因の拒否不能、権威の源泉と権威の否定不能、独立と従属、人格の育成と非人格化、目的の形成と目的のやむをえざる変更、意思決定のための諸制約の探求、特定なものを探求しながらも全体との関連の保持、リーダーの発見とリーダーシップの拒否、現世支配の希望と見えざるものによる支配—これが本書で述べた社会における人間の物語である。

かような物語は終局的には、信念の表明を必要とすることになる。私は人を自由に協働せしめる自由意思をもった人間による協働の力を信じる。また協働を選択する場合にのみ完全に人格的発展が得られると信じる。また各自が選択に対する責任を負うときにのみ、個人的ならびに協働的行動のより高い目的を生み出すごとき精神的結合にはいり込むことができるかと信じる。協働の拡大と個人の発展は相互依存的な現実であり、それらの間の適切な割合すなわちバランスが人類の福祉を向上する必要条件であると信じる。それは社会全体と個人とのいずれについても主観的であるから、この割合がどうかということを科学は語りえないと信じる。それは哲学と宗教の問題である。(山本安次郎・田杉競・飯野春樹監訳、ダイヤモンド社、1968年)

#### IV. 情報革命における資本と組織

情報革命は、20世紀の中頃から助走を起し21世紀初頭の現在その真只中にある。情報革命とはいかなる社会変革であろうか。それは、ルネッサンスに初動を始めた科学・技術が産業革命と呼称されている時期に本格的な展開を労働手段の道具から機械・容器から装置への飛躍をもって本格的発展を起した延長線上にある現象である。この時期にマルクスはその現象を明確に捉え、この現象を基礎として成立・展開してゆく産業資本の成立・発展してゆく資本制生産社会の全構造を画ききったのである。

資本制生産社会は企業が存立をかけて競争する社会であり、その勝敗は管理の優劣にかかっている。管理の領域に科学・技術が入って来たのである。管理革命であり、経営学が20世紀の初頭に生れてきたのである。このとき、経営学は企業目的達成にのみ奉仕する流派と企業とは何かの間から組織論へと深化し拡大して、あらゆる組織を対象とする学問

へと進む展開をバーナードは見事に画いた。

そして、今や科学・技術の発展が産業革命の延長線上であると同時に管理革命の延長線上でもある現象として情報革命が生れてきた。それは、物づくりの領域とコミュニケーションの領域の科学化・技術化である。前者の技術がハード、後者の技術がソフトと分けて言われるようになった事実がそのことをよく示している。そしてまた、新たにコミュニケーションの科学=技術化についてはアナログからデジタルの飛躍が決定的なものだといえる。それは、人間の思考の具体的表現である言語を含んで一切のシンボルが記号化され記号が数値化され、それがシンボルの担体との結合ではなく、即エネルギー化されることになったことである。これが人工知能 AI として急速に論議の的となっている。この情報革命が資本と組織を巻きこんで進んで行く事は、いうまでもない。組織の領域については具体的様々な様相が伝えられているが、もちろん資本についても同様である。私は、数年前から新資本形態を指摘しているが、その反応はほとんどない。

情報革命がもたらした新資本形態は情報資本である。情報資本は商品・資本の実体=実態のある価値物を売買して利益をえる資本ではなく、企業価値の情報によって売と買の差額のみ得る利益をえる資本である。もってもいないのに売り、安くなって買ってもその差額を利益として得る資本である。それは先のことが分らぬ時代なら、確実に利を得ることが可能ではなかったが、企業の現在と未来予測がかなり確かなものと計算可能となり、その情報によって現実に利を得る資本の成立である。情報資本は実体を伴わない架空資本であって実体をもった資本ではない。架空資本の成立は、これまでの資本である商業資本・貸付資本・産業資本を実体資本と範疇化する。だが、それは現実資本として実体資本の10倍の金額が動いていると言われる。マルクスは、産業資本を決定的な意味をもって資本として取り上げている。だが、資本の本質は商業資本にあるのではないか。

この情報資本の市場は世界単一市場である。市場の拡大発展は地域から地方へ、地方から一国へ、それぞれの国内市場は国外市場をもって拡大して行った。だが、市場経済の発展が1990年社会主義社会の崩壊とともに、グローバル・単一市場体制となり、しかもその単一市場は情報革命に支えられて、地球上が単一市場として機能する場となり、それを可能・促進する技術を提供した。

この実態を前提とした金融政策をどの国もとっていない。むしろその逆である世界単一市場とはいかなるものか。情報革命は資本も市場もまた組織と把握されるようになって来た。どうして、そのような立論が可能となるのか。

情報革命の曙に立った N・ウィナーは、自動機械をコミュニケーション=コントロール=フィード・バックの3要素か自己組織システムであり、自己組織性をもった物体であると把握することによって、自動機械を生物・人間と同一範疇の物として論じた。

この把握はマルクスの資本把握に適用したとき、個別資本・部門資本・総資本のそれぞれが自己組織として理解されることになる。この理解を先に述べた市場の拡大のグローバル単一市場に当てはめたとき、それはまさしく世界は〈単一のシステムである〉となる。そして国家というこれまで人間のつくった最も大きなシステムはグローバル単一市場という自己組織システムの部分システムとなった。それぞれの国が自国の市場に立って立案・

実施する金融市場は決して意図通りの結果をもたらすことはない。

むすびにかえて

不十分な「IV情報革命における資本と組織」の論述を補うものとして、既に発表した「21世紀の企業像—株式会社と情報革命」の付表を不十分なものではあるがここでも示したい。



科学と作業体系・市場・法秩序との関係図

区分	時代	作業体系	市場	法秩序
I 産業革命	18世紀の 終りから	①労働・労働手段労働対象のうち、労働手段・労働対象の科学化・技術化 ②道具・容器から機械・装置へ ③人力から水力・火力・電力エネルギーへ	①商品と貨幣、そして資本 ②非労働製造物の労働・土地・資源の商品化 ③商業資本・貸付資本から産業資本へ 共同体の解体、資本制社会へ ④地方市場から国内市場へ	①自然の秩序（法・規則）から人間の習慣と法へ ②社団法人・財団法人と会社法 ③コンメンダ・ソキエタスの合名・合資から株式会社へ ④権利証券の所有者を出資者とする所有者支配の法人 議決権・配当請求権・残余財産分配権 ⑤有限責任、所有者（株主）支配
II 管理革命	20世紀の 始めから	①労働・労働力の科学・技術化、能率増進運動から科学的管理へ ②職務体系から組織の科学科・技術化 ③テイラーの科学的管理、テイラーの二命題 「心から兄弟のような協働」と「経験から科学へ」 ④管理論における主流と本流	①独占資本・金融資本・擬制資本の成立 ②権利証券の商品化→擬制資本の成立 ③階級社会化の進行 ④国内市場から国債市場へ	①大規模化に伴う株式の分散と機関所有の出現 ②所有者支配から経営者支配へ ③ドラッカーの「見えざる革命」
III 情報革命	20世紀の 終りから	①第二次産業革命＝IT革命 電気通信技術におけるアナログからデジタルへの大変革 パソコンとネット 自動機械体系の成立 ②第二次管理革命 自動機械体系の理論化、自己組織性とプログラム、生物・人間・自動機械の同一性の認識 ③人間界と自動機械界	①資本制社会の発展と社会主義国の崩壊、情報社会化によるグローバル市場の形成 ②第五の資本形態＝情報資本－実体資本に対する架空資本 ③競争の激化・利潤率・利子率の低下 ④市場・資本の自己組織性	①市場の変質、リスク社会化、不祥事の頻発 ②機関所有の変質→経営者支配から所有者支配へ ③マネジメントからガバナンスへ ④大企業優先のガバナンス ⑤法と実態の乖離、市場と国家

※<神の見えざる手>、これからどう働くか